

平貞文歌「ありはてぬ」ならびに存疑歌「花の雫」小考

はじめに

金沢 朱美

次の歌は『古今和歌集』雑下九六五番に収められている平貞文の歌である。

つかさ解けて侍りける時よめる 平貞文

あり果てぬ命待つまの程ばかり憂き事しげく思はずもがな

貞文の多くの歌や故事が『古今和歌集』、『平仲物語』以降、勅撰集、私撰集、私家集のみならず、物語や説話集、歌論書等で取り上げられたが、本稿では、右の歌「ありはてぬ」が同時代ならびに後世の歌人に与えた影響や歌論書における評価を中心に考察したい。

次に、本稿のなかでも言及している、貞文の作であるかどうかという疑問のある「花の雫」に言及し、貞文作の可能性について探ってみた。

一 同時代ならびに後世歌人における「ありはてぬ」の受容

同時代の歌人で、最も早く「ありはてぬ」を私家集に採り込んだのは、管見によると女流歌人の伊勢であり、『伊勢集』では一六八番歌に「ありはてぬ」が原歌のまま採られている。

伊勢は、『平仲物語』と『伊勢集』を比較することにより、二人の交流が相当程度まで検証する事ができるほどに、貞文と歌の贈答を通して交流があった。しかし、古今和歌集の詞書を読むと、貞文が伊勢に「ありはてぬ」を贈ったものではないことが窺える。

貞文は古今集歌人ではあるが、藤原時平との軋轢により、政治的に不遇であった。伊勢を貞文と時平が争って、貞文が伊勢と懇ろになり、その結果、貞文が官位を止められていた事件は『平仲物語』一段にも語られている。また、萩谷朴氏によると、『寛平遺誠』のなかでも時平に言及した箇所¹⁾に記述されている「左大将藤原朝臣者。功臣之後。其年雖少已熟政理。先年於女事有所失。朕早忘却不置於心。」の「於女事有所失」に該当する出来事だと思われる。²⁾

このように見ていくと、貞文は伊勢に関する事件で失脚させられたのであるから、あるいはその時に伊勢に「ありはてぬ」を贈ったことも考えられるであろうか。

「ありはてぬ」は後世の歌人にも大きな影響を与えた。貞文が「ありはてぬ命待つまのほど」と詠んで後、多くの歌人がその心と技法を踏襲した。しかし、なかには貞文の「ありはてぬ」をほとんどそのまま掲載した私家集がある。

『和泉式部統集』³⁾の最後を飾る一五四九番歌は貞文の歌であるが、第四句は「いとかく物を」となっている。

ようさり、まかりいでてふみみるに、とのなりけるものを、まづあけて、いみじういはれても、みづからのみ

ありはてぬいのちまつまの程ばかりいとかく物をおもはずもがな

また、源重之女の家集である『重之女集』の最後にも貞文の「ありはてぬ」をそっくり継承した歌が載る。

長からぬ命待つ間のほどばかり憂きこと繁く嘆かずもがな

『重之女集』は、源重之の女の私家集である。百首歌の祖といわれた父親の試みを継承し、定数態を試みたといわれる。「書陵部本」甲本には百首歌を中心に追補した歌が載り、一一五首が残る。春、夏、秋、冬、恋：

と題詠の後に「ある少将、世をそむき給ふとき」と詞書があり、一連の歌の最後に「長からぬ」が置かれている。一目して題詠のなかに自然を詠んだ歌が多いようであるが、最後の詠だけが人生の苦悩を正面から捕らえて吐露しているようである。重之女は、何故、貞文の「ありはてぬ」を少し改変してここに置いたのであろうか。父親の重之が没したのは、長保二年（一〇〇〇）とされるから、女は長保年後をきたたであろう。とすれば、重之女が生きた年代は『源氏物語』に「ありはてぬ」が引歌として採りいれられ、盛んに流布していた頃でもある。

『源氏物語』の作者紫式部と同時代を生きた赤染衛門の家集『赤染衛門集』にも、貞文の存疑歌「花の季に」を友人の「ためよし」と共に話題にして語り合ったというエピソードが載っている。

『赤染衛門集』のエピソードや『和泉式部集』における「ありはてぬ」の採歌等の事実から、「ありはてぬ」ばかりでなく、古今集歌人貞文の歌はこの頃までに歌人の間で相当程度、論評されたり話題に上り、受容、継承されてきていることがわかる。

以前、別稿にて考察したので本稿では触れないが、貞文歌「昔せし」は、後世における和歌としての評価の高さのみならず、その成立の経緯ゆえに「ありはてぬ」より更に大きく、劇的な話題を伴って説話文学や『源氏物語』に非常に大きな影響を与え、歌人の矚目するところとなった。また、『平仲物語』が『貞文日記』として残り、家集の存在も考えられる時期ではないか。これらも一〇世紀後半～一世紀前半の歌人たちにさまざまな話題を提供したと考えられる。

このようなことを考えると「ありはてぬ」は当時、貴族の間でもはやされ、盛んに誦詠されていたのではないだろうか。後述する歌論書においても「常に詠吟すべき歌なり」と論評されている。『伊勢集』『和泉式部集』

続集』『重之女集』のような「ありはてぬ」のほとんどそのままの採歌か、同工異曲の歌は数多生まれた。「ありはてぬ」は当時、既に古歌としての地位を確立していたと考えられる。

嫻々とした余韻を残しつつ、後述する「直体」の形で真っ直ぐに貴族歌人のはかなげな心や厭世観を代弁するかのようには詠んでいるがゆえに、和泉式部も重之女も「ありはてぬ」の心をそのまま取り込み、自身の家集の最後にふさわしい歌として置いたのではないか。

このほかにも同工異曲の歌を求めれば数多の歌が勅撰集にも私家集にも私撰集にも掲載されている。歌人への影響がいかに大きく、その心に浸透していったかが窺われる。

他にも「ありはてぬ」「ありはてぬ命待つま」「憂き事しげ（き）」「おもはずもがな」と部分的に継承し、多くの歌人が同じ技法で別の心を詠んだ。

二 歌論書や物語における「ありはてぬ」

「ありはてぬ」の影響を見ていくと、このように枚挙に遑がないほどであるが、今、歌論書での評価を見てみたい。

忠岑『和歌體十種』、貫之『新撰和歌』、俊頼『俊頼髓脳』、範兼『後六々撰』、『統歌仙三十六人撰』、定家『八代抄』、後鳥羽院『時代不同歌合』、二条為右『練玉和歌抄』等が「ありはてぬ」についてその著書のなかで言及し、あるいは秀歌として選んでいる。

『俊頼髓脳』は、「ありはてぬ」を「げにと聞ゆる歌」の代表歌としている。

『古今和歌集二度聞書』には、「心、誠に哀にたぐひなくや。一切の心思ふべき理也」と評され、また、『古今采歌抄』（飛鳥井雅俊一四九八年）も、「世にありはてぬ。いのちまつ間のしばしのほど。あはれ憂きことしげく

思はずもがなと也。常に詠吟すべき歌なり。」と評している。

稿者は以前、貞文歌で秀歌と定評のある歌を検討した結果、「直体」の歌が多いようであると結論したことがある。「ありはてぬ」は、忠岑『和歌體十種』において「直体」の代表歌として選ばれている。「直体」は『和歌體十種』のなかで、「此直體、義實以無曲折為得耳」と説明されている。藤平春男氏は、人生のはかなさや無常觀に支配されているのが常であった当時の貴族の心に、「主觀を直叙し、比喩などの特別な修辭法を用いない歌」と説明し、田中裕氏は、「確かな心の動きがすなほに表はされているのを特徴とするもので、心と詞が直接に、しかも過不足なく対応する体といひかへることもできるであらう。」と説明されている。

「ありはてぬ」が人々に真つ直ぐに訴えてくるものは大きかったであろう。貞文の勅撰集に入集した二六首のうち、秀歌として後世も多くの歌人達に注目された歌は、「ありはてぬ」を始めとして、技巧を凝らした歌よりも、繊細な感情をストレートに訴えた抒情の調べがあわれ深い歌が多い。

『古今栄歌抄』に「常に詠吟すべき歌なり」と評されているが、実際、『古今栄歌抄』の論評が出るまでに、右に見てきたように広く人々によつて詠じられてきたのである。貴族の無常觀を代表した同歌は、初詠当時から人々の心を捉え、いかに人口に膾炙した歌であったかはこれまで見てきた経緯で知られる。

「ありはてぬ」の、このような経緯を視座に据えて考察すると、波乱の生涯を送った和泉式部の家集の続集や『重之女集』の最後が、同歌で締めくくられていることが改めて理解できるようである。

「ありはてぬ」は、物語にも引歌として採りいれられたり、物語中の人物に詠ませたりされて伝播している。『源氏物語』でも「ありはてぬ」はしばしば引歌として物語の情趣を深め、展開を促す役目をしている。「松風」

「鈴虫」「宿木」「御法」の帖にそれぞれ引歌として見える。

『大和物語』一四二段では、故御息所御姉という架空の人物に、「ありはてぬ」を詠ませている。

三. 「ありはてぬ」のまとめ

以上、「ありはてぬ」の誕生以来、主に後世歌人の詠歌における影響や、歌論書での評価、物語における影響等について考察してきた。「ありはてぬ」が、貞文在世中に既に貫之によつても評価されていたこと、貞文没後間もない頃に、既に古歌としての地位を確立し、物語に盛んに採りいれられたり、物語の情趣を深めるための引歌として影響を与えたこと、女流歌人によつてもそのまま継承され、私家集の最後を飾るほど貴族の心に浸透し、好んで誦詠されたであろうこと、歌論書や秀歌撰にもしばしば取り上げられ、注目されてきたこと等を見てきた。

四. 「花の掣に」私見

九五七〜九六四年の間に生まれたと推定され、一〇四一年に八五、六歳で存命していたことが知られている赤染衛門の家集に次のような歌と逸話が載っている。桂宮本では左記の詞書きのみが掲載されており、肝心の歌は掲載されていない。

春ためよしが来て物がたりせしつゝるでに花のしづくに濡ると見し
 平中が詠みたりけると云ひし後遣りし

榊原本では次の詞書きと和歌が掲載されている。

春ためよしが来て物がたりなどして、へいちふが「花のしづくに濡ると見し」と詠みたるとなむ答と見て語りて帰りて後、久しく音せざりしに

四八三 春なれど花の雫や見えざりし涙をかけて云ふ人もなし

現存の貞文歌とされる判明している和歌は一一四首である。他に存疑歌は多くあり「花の雫に濡るゝ」の句を伴う歌は判明していないが、貞文歌である可能性は十分に存すると考える。『平安朝歌合大成二』に拠ると、「仁和四年く寛平三年秋内裏菊合」のなかに、次の歌が採録されている。

津の国の田蓑の島 洲浜に植ゑたる菊のしたに女袖を笠に着て貝拾ふかたしたり

五 田蓑とも今は求めじたちかへり花の雫にぬれむと思へば

同じ歌が『玉葉集』巻五秋下では、左記の詞書きを伴って掲載されている。

寛平の菊合に田蓑の島の菊をよみ侍りける 読人しらず

七七七 田蓑とも今は求めじたちかへり花の雫にぬれむと思へば

貞文没（九二三年九月廿七日）後、赤染衛門が歌人として活躍を始める頃まで五〇年足らずである。

貞文は、「ありはてぬ」考でも考察したように、『古今集』『後撰集』以下の勅撰集歌人としても、『貞文日記』による「色好み平仲」としても、既に広くその歌も語り伝えられ、その事蹟は虚実織り交ぜて語られていた頃であるから、貞文の歌が赤染衛門の歌人仲間間でさまざまに論評されていたであろうと考えても不自然ではない。「ためよし」は田中恭子氏、武田早苗氏らに拠ると橘為義のこと¹⁶⁾で、ためよしは、「花の雫に濡ると見し」を短所であると論評した。それに関し、武田早苗氏は、赤染衛門の歌の「花の雫や見えざりし」は「平仲にそのような歌はないことを言うか。」と解釈しておられる¹⁷⁾。

赤染衛門は話題になった平仲歌「花の雫に」を引き取って久しく音沙汰のなかったためよしに歌を贈っている。

前述の「内裏菊合」の時の内裏は、宇多天皇の内裏であり、貞文は宇多

天皇とごく近い親族関係にあたる。貞文の大叔母ないし叔母に当たる班子女王は、光孝天皇の后であり、宇多天皇の母后であった。『大日本史・列伝』第十六皇子四に従うと班子女王は貞文の叔母であり、貞文は茂世王の子、好風の弟であることになり、貞文と宇多天皇は従兄弟であることになる。

一方、好風の叙爵時期（貞観一五年）と貞文の叙爵時期（延喜六年）が三年も離れていることから、好風の一男説がある。

班子女王に寵愛されていた貞文は、それより以前に光孝天皇のために屏風歌¹⁸⁾を献じており、歌人として既に名のあつた貞文が、「内裏菊合」に「花の雫」を出詠したことは考えられると思う。

おわりに

以上、貞文の代表歌の一つである「ありはてぬ」の誕生と歌人による受容の経緯ならびに存疑歌「花の雫に」を考察した。

貞文歌の秀歌とされた歌のなかには、「昔せし」のように劇的な話題性を伴い、話題の方でも説話文学等で語り続けられた歌と、「ありはてぬ」のように貴族の無常観を代表し、代弁し、歌人の間で誦詠され続けてきた歌があるが、どちらも「直体」という技巧を凝らさない真つ直ぐな詠みぶりの歌である。

貞文の歌のなかで後世、秀歌であると評価された歌は、皆「直体」であると思われるが、「直体」という一つの伝統の歌風のなかで、主観的な心情をそのまま真つ直ぐに吐露した心深い歌として、「ありはてぬ」はその誕生以来、歌人の間で歌い継がれてきたのである。

一方、「花の雫に」は貞文作であるか否か、疑いのある歌であるが、貞文作であるという可能性について、貞文の、皇室との縁故的背景から考えて

みてあり得るとの結論を得た。

【注】

1 『古今和歌集目録』に拠ると、貞文は、「寛平三年十二月任内舎人。五年二月十

六日任右馬権少允。九年五月二十五日任右兵衛少尉。(後略)」であり、官位をとめ

られた事件は、寛平七年に起こったと考えられる。

2 萩谷朴『平中全譜』一七一―一七二頁。昭和三四年九月
清水文雄校注『和泉式部集・和泉式部統集』一九八三年に拠ると、『和泉式部集』
と『同統集』は、成立順序が逆であるとされている。

3 長澤美津編『女人和歌体系』巻二 風間書房 昭和四〇年
『国史大系・尊卑分脈第三篇』五九頁に、「長保二於奥州死」とある。

4 金沢朱美「平貞文歌『昔せし』考」目白大学人文学部紀要「言語文化篇」第八号
平成十四年一月

5 例えば、『新勅撰和歌集』恋二、七二四(七一六)、『一条撰政御集』六九番歌「と
ばりあげのきみに」
女を見てつかはしける 謙徳公

たとふればつゆもひさしきよのなかにいとかくものをおもはずもがな
『新勅撰和歌集』十五卷恋歌五、一〇〇九、『拾遺愚草』
恋十首歌よみ侍りける時 権中納言定家

だれもこのあはれみじかきたまのをにみだれてものをおもはずもがな
『万代集』一一卷恋歌三、二三四二、
権中納言帥俊女

例えば、『和泉式部統集』
おなじくはけふをわがよのかぎりにてあすまでものおもはずもがな

8 二十日、今日のほどはおもふにも、むかしあはれにて
ありはてぬわが身とならば忘れじといひしほどへぬ我が身ともがな
『続古今和歌集』卷十七雑歌上、一五八七(一五九五)、
月歌とて 平義政

いつまでとこのころをとめてありはてぬ命まつまの月を見るらん
金沢前掲論文

9 藤平春男『歌論の研究』六五頁。昭和六三年

10 田中裕『後鳥羽院と定家研究』二九七頁。一九九五年
金沢前掲論文

11 『源氏釈』「松風」「ありはてぬいのちをかぎりにして契すぐしきつるを……」
12 『紫明抄』「鈴虫」「げにありはてぬ世いくばくあるまじけれど……」
13 『源氏釈』「宿木」「げにこの世はみじかゝめるいのちまつまもつらき御心にみえ
ぬべければ……」
14 『河海抄』「御法」「しばしもかゝつらはむいのちまつまは……」
15 『大和物語』では「なげかずもがな」
16 田中燕子氏に考証がある。『赤染衛門集全釈』四三二頁。風間書房 昭和六一年
和歌文学大系20『賀茂保憲女集／赤染衛門集／清少納言集／紫式部集／藤三位集』
一六四頁。明治書院 平成二二年

17 「水のあやをおりたちてきむぬぎちらしたなばたつめに衣かすよは」『拾遺和歌
集』雑一〇九一にも載る。

(かなざわ あけみ 目白大学外国語学部 教授)